

# 住井するゑとその文学の里(四十六)

—牛久沼のほとり—

牛久市文化財保護審議委員

栗原 功

戦争を終結した老首相鈴木貫太郎

鈴木貫太郎は、慶応3年(1867年)12月24日(翌4年9月、明治に改元)に父為之輔由哲が下総国関宿藩(現野田市)藩主久世家の泉州飛び地(※)領4600石余を所掌する代官だったの

で、その陣屋(現大阪府堺市中区伏尾)で生まれた。  
鈴木は海軍官僚になった。鈴木は、明治17年(1884年)9月に東京築地の(のちに広島県の江田島に移転)海軍兵学校(士官養成所)に第14期生として入学し、大尉に進級すると選抜されて海軍大学校(将校の最高学府)に入学。親任官の少将、中将に累進し、最高級の大將に昇り、米英に次ぐ戦力を保有する日本海軍の連合艦隊司令長官、軍令部総長(大元帥)天皇を輔弼する(を



第一線  
を引いた  
鈴木は、  
昭和4年  
(1929  
年)1月に  
侍従長(天  
皇に常侍

首相在任中(昭和20年4月7日〜8月15日)の78歳の鈴木貫太郎―千葉県野田市提供

奉仕する)に就任。在任中の昭和11年(1936年)に起こった二・二六事件で、侍従長官邸において、暴徒に左胸心臓部などを撃たれてひん死の重傷を負うが一命を取り留めた。  
ところで、東条首相は、昭和19年(1944年)7月6日の日本委任統治領サイパン島失陥の責任を問われて辞職し、小磯昭陸軍大將が首相に就任するが、翌20年(1945年)4月5日に辞職した。  
後継首相の最大の使命は戦争を早期に終結することであった。4月5日の午後5時から、宮中で、重臣(現職の内大臣、枢密院議長と元首相を指す)会議が開かれた。長い議論の結果、首相候補は鈴木貫太郎をおいてほかにないとの合意に達して奏薦(天皇に奏上して推薦する手続きを指す)、78歳の老人鈴木貫太郎に『天命降下(天皇が鈴木に内閣総理大臣となることと他の國務大臣たるべき者を奏薦することを命じること)』となつて、4月7日に鈴木内閣が成立した。

組閣終了後、首相官邸の執務室で独り鈴木は、連合艦隊司令長官(当時は57歳)在任中の大演習を思い出していた。同艦隊が遠州灘を航行して呉軍港

へ向かう途上、かつて一度も経験したことのない台風による大暴風雨に襲われた。同艦隊は何十隻の艦船が縦列で航進し、波濤に鈴木が乗る旗艦3万トンの長門も木の葉のようにもたえそ

による御前会議を開いた。まず迫水書記官長が起立して、ポツダム宣言の全文を朗読し、ついで東郷茂徳外相が立ち、「国体護持(天皇制の存続)」を大前提として、ポツダム宣言の無条件受諾が最善の方法であることを論理正しく明確な口調で述べた。平沼枢相、米内光政海相は東郷外相と同意見だった。だが、阿南惟幾陸相は『私は外務大臣の意見には反対である』と前置きして、あくまでも抗戦すべきであると述べた。梅津美治郎参謀総長および豊田副武軍令部総長は、『一億玉砕』を期し、最後の決戦に出るとして阿南陸相の説を支持した。出席者の意見が3対3に分かれ対立してしまつたが、いずれも国を憂いる情熱をもって論議している

鈴木貫太郎の執務姿勢は、至誠を貫く。姑息な策をろうせず、また閣議などをリードすることもなく、閣僚らに存分に意見を述べさせた。従来の内閣の閣議などよりもずっと長時間を要したので、時々、迫水久常書記官長の注意があつたが、それでも意見の出つくすのを待った。7月26日にベルリン郊外ポツダムにおいて、米英中3国首脳の名で日本に降伏を要求する共同宣言があつた。8月6日に広島に原爆が投下され、8月8日のソ連の対日宣戦布告が鈴木に戦争の終結を決断させた。鈴木は『ポツダム宣言受諾の可否』を決するため、8月9日午後11時30分

から、宮中防空(こう内)一室で、天皇臨席のもとに、平沼騏一郎枢密院議長を交え、最高戦争指導会議構成員

から、宮中防空(こう内)一室で、天皇臨席のもとに、平沼騏一郎枢密院議長を交え、最高戦争指導会議構成員

から、宮中防空(こう内)一室で、天皇臨席のもとに、平沼騏一郎枢密院議長を交え、最高戦争指導会議構成員

※牛久市域の信太郡奥原村、嶋田村、大和田村、正直村、井ノ岡村、桂村、久野村、7カ村3190石余りも関宿藩久世家領であつた。 -広報うしく 2009.12.1- 14